

令和7年度第1回宗像市総合教育会議議事録

【日 時】 令和7年7月17日（木）午前10時から午前10時55分まで

【場 所】 宗像市役所 本館3階 304会議室

【出席者】 宗像市長 伊豆 美沙子
教育委員 石丸 哲史
教育委員 大庭 多美枝
教育委員 脇田 哲郎
教育委員 野上 順子
教育長 猿樂 隆司

【その他の出席者】 教育部長中村博二、子ども子育て部長早川ちさと、教育部主幹指導主事毛利拓也、教育総務課長長濱真弓、教育総務課指導主事末崎浩嗣、教育総務課指導主事小島恵太、教育支援室長吉永さつき、子ども支援課長恵谷英之、子どもの自立サポートセンターホープ所長吉武研二、図書課長中野道子、世界遺産課長白木英敏、子ども育成課長許斐知加、子ども家庭センター長有吉富美子、秘書政策課秘書係長井口綾、教育総務課教育総務係長安部美代子、教育総務課教育総務係主任主事荒木せりの
※傍聴なし

1 開会

【伊豆市長】 みなさんおはようございます。暑い中、ご出席を賜りましてありがとうございます。ただ今より令和7年度第1回宗像市総合教育会議を開催いたします。本日の会議は、宗像市総合教育会議運営要領第4条第1項に基づき、公開としております。

2 協議事項

(1) 不登校対策について

【伊豆市長】 今回の協議事項は、不登校対策についての1項目です。担当から説明を申し上げた後、質疑応答を行い、協議懇談・意見交換ができればと考えております。教育委員の皆様から忌憚のないご意見を頂きますよう、よろしく願いいたします。それでは早速、不登校対策についての協議に入ります。では、事務局より、(1)について説明をお願いします。

【教育支援室長】おはようございます。教育支援室の吉永と申します。よろしくお願いいたします。本日資料を3枚追加でお配りしております。公表前の数字が入っているものになりますので、この会議が終わりましたら回収させていただきたいと思えます。それでは本日お配りした、資料1ページ目から説明をさせていただきます。まず、令和元年度からの1000人当たりの不登校児童生徒数の推移となります。オレンジ色が全国、青が福岡県、黄緑が宗像市となります。左側の小学校は国、県よりも、宗像市のほうが低い数値で推移をしております。右側の中学校の全国の数値とは上回ったり下回ったりしておりますが、宗像市は福岡県平均よりは低い数値になっています。ただ、ご覧のとおり、国・県・市とも、令和元年度から令和5年にかけて急激に数値が上昇しています。こちらに載せてはおりませんが、令和6年の4月・5月の数値と令和7年の4月・5月の数値を比較しましても、ここからまたさらに伸びているというような状況でございます。特に令和2年4月、コロナの緊急事態宣言発令以降の伸びが急速に上がっておりますので、この影響が大きいかと。直接コロナに感染したというだけでなく、当時、学校に自粛で来なくていいというような風潮になってしまったり、さらにコミュニケーションをとる機会がなかったり、不登校になってしまうという、コロナによる影響が大きかったのかなと考えております。

次はもともとお配りしているものです。COCOLOプランです。配布資料は令和3年度の数字ですが、令和5年度段階の全国の小中学生の不登校は約34.6万人、学校内外の専門機関等で相談指導を受けられていない小中学生は13.4万人となっております。全国的な不登校児童生徒の増加を受けまして、国は、不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにするということを目指し、誰1人取り残されない学びの保障に向けた、「不登校対策COCOLOプラン」を取りまとめました。プランは三つの目指す姿に応じた取組とその取組の実効性を高める取組とでまとめられております。

まず一つ目の取組、「不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整える」です。この分野に関して、本市では、エール、ホープ、それから県と連携して、玄海の家ChotGKI、フリースクールの活用など、学校外でも様々な学びの場を確保しております。エール、ホープ、GKIにつきましては、この後、資料2で詳しく説明をさせていただきます。

それから取組の2番目、「心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援する」では、各校で、校長・教頭をはじめ、生徒指導、それから養護の先生、スクールソーシャルワーカーなどにより、定期的に生徒支援委員会、名称は学校によって異なりますが、不登校やその傾向がある児童生徒についての情報共有ですとか、対策を検討する会議を開いて、児童生徒の支援にあたっております。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門家による相談体制と、教育委員会には教育

相談員を配置しまして、様々な相談を受ける体制を整えているところでございます。

それから取組の三つ目、「学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする」では、本市では以前から小中一貫コミュニティー・スクールを推進しており、小中一貫の中1ギャップの解消はもちろん、地域を巻き込み、学校だけでなく、地域と連携しながら、子供たちの学びと成長を支えているところです。そのほか、1人1台端末を活用した授業ですとか、いじめ事案の早期対応、特別な支援を必要とする児童生徒の通級指導教室、これは今年、赤間小学校、河東小学校の2校に新設しまして、現在は合計で小学校4校、中学校1校に開設をしております。また、日本語指導につきましては、今年度、日本語指導コーディネーターを教育委員会に配置しまして、年々増加している「日本語の指導が必要な児童生徒」は今年度現在22名になっておりますが、今後も増加が見込まれますので、それに対応できるようなカリキュラムづくりとか、そもそもの指導体制の構築を進めているところでございます。

そして、これらの取組の実効性を高める取組ということで、「不登校の児童生徒が学びや必要な支援につながっているかを把握」と、「エビデンスに基づきケースに応じた対応を可能とするための調査、一人一人の不登校要因分析・把握」が必要になってきます。この調査の結果が、今回追加でお配りした資料の2枚目、3枚目になります。グラフ2枚目が、児童生徒の支援状況の推移をお示ししております。棒グラフの1番左側の青いところ、これがエール、ホープ、児童相談所など学校外の機関で専門の相談・指導を受けている児童生徒の数になります。それから、黄色のところは養護教諭ですとか、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーによる、校内で専門的な相談・指導を受けている児童生徒の数になります。緑はその両方を受けた数になります。次に薄いグレーと濃いグレーがあるのですが、薄いグレーは学校の担任等から継続的な相談・指導を受けている児童生徒数、濃いグレーは学校内外の機関等で専門的な相談・指導を受けていない児童生徒数になります。濃いグレーが、令和4年度までしか表示されていないかと思いますが、令和4年度までの調査は、専門的な指導を受けているか、いないかという分け方になっていましたので、受けていないものは濃いグレーで表示されていましたが、これを「専門的な指導を受けていないからといって、どこもつながっていないのか」というところを調査するために、「専門的ではないにしろ、学校の担任等によって継続的な支援を受けている児童生徒がいるのではないか」ということで、追加の調査が令和5年度から始まりました。その調査の結果、本市におきましては、専門的な支援を受けていないものの、受けていない者の中ではほぼ全員が、学校との継続的なつながりを持っていて、どこも全くつながっていないという児童生徒は1人もいないという結果になりました。

担任等が継続して電話でのやりとりですとかプリントなどの配布物の受け渡しとか、家庭訪問等で子供の様子を見たり聞いたり、あるいは学校のクラスの様子をお伝

えするような形で、継続してつながりを持って、相談・支援を続けているというのがよく分かりました。

次は本日お配りした3枚目の資料で、「不登校の主な理由」となります。複数回答ですのでグラフの総数と不登校の実数は合致しません。不登校の理由としましては、従来からあります「学業不振」、4番目ですね、学業不振等もありますが、11番目の「学校生活に対してやる気が出ない」とか、12番「不安や抑うつ」、それから、9番「生活リズムの不調」等が増えています。いわゆる令和型の不登校です。それから、13番「障害に起因する特別な教育的支援」、14番「個別の配慮についての相談をしている」、こういった方が不登校になってきているという状況です。数が多くなっています。そもそも特別な支援を要する、配慮を要する障害ですとか発達に課題がある児童生徒の数そのものが年々増加している状況にあります。それが増えると同時に、そのままそれが不登校につながる、不登校の増加につながるような対策を検討していく必要があるのかなと思っております。

そこで、本市の今年度の対策ですけども、あらかじめお配りしている、2枚目、「全ての児童生徒に安心できる学びの場を」というリーフレットを作成しております。悩みをどこで相談したらいいとか、相談一覧にとべるQRコードのほか、こういった場合は、ここに相談してくださいねというようなことが分かるような、フローチャート形式で作成しております。裏面は、教員に、このリーフレットの活用について説明するものです。こういったものを作成し、どこにも相談できないという状況にならないように、各相談に少しでもつながりやすくするようなリーフレットを作成してお配りしてます。

さらに次の資料ですけども、今年度、不登校に係る重層的な支援を行うという仕組み・組織を改めて作りました。左側のホールケーキみたいな図は、児童生徒の状況に応じた生徒指導のレベルをあらわした図です。1番上の第4層が困難課題対応的、この場合は、不登校、あるいは不登校傾向にある児童生徒に係る対応、その下が第3層で、課題早期発見対応、休み始めの方への対応ですね。第2層は、そもそも休まなくて済むような、何か悩みを抱えたときにすぐ相談できる体制等の整備。それから第一層、発達支持的な指導、この場合は、そもそも学校が楽しいとか、安全と思えるような学校づくりの段階となります。それぞれのレベルに対して、どこが対応していくかというのが右側の三角の図であらわしています。不登校対策会議として対応していく1番上の実務者連携会議、ここは、この後、詳しく説明しますが、エール・ホープ等による対応ですとか、また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる不登校、また、その傾向にある児童生徒の個別のケースについて、関係者で情報共有や個別の対策を検討しているケース会議の部分になります。これは、これまでも関係各課で定期的に会議を行いまして、不登校児童生徒の支援を行ってきております。今回新たに作ったのが、その下の幹事会の部分になります。今年度不登校対策

を所管する所属として、教育支援室を作りましたので、ここを中心としまして、不登校にならない未然防止につながるような政策的な取組それから、先ほど説明しましたけど、学校との継続的な支援として学校とつながってはいるものの、例えば専門的な支援につながってはいない児童生徒をどう、どこにつながっていくかとか。そういったところを検討するような部署になります。1番下の本部会議は、教育長部長等による組織で、幹事会で検討した検討状況を確認したり、施策に対する合意形成を図る部分になります。こちらは不登校対策に限らず教育委員会内での施策等の方針を検討したり、協議したり決定したりする組織で既存の組織になります。今回新しく作ったのは、真ん中の幹事会というところの部分になります。それぞれの構成メンバー、目的、内容につきましては、その裏面にございますので、後でご覧頂ければと思います。幹事会は6月からスタートしました。まだ1回しか開催してない状況ですけども、まずは不登校の事由のもう少し細かい分析ですとか、学校による学校内での対応状況、それから学校による不登校傾向の違いなど現状の把握分析を行いながら、不登校対策に係る検討から進めていきたいと思えます。教育委員の皆様には検討するに当たって、どういった切り口がいいかとか、こういう取組が良いのではないかな等のいろんなご意見を頂ければと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。説明は以上です。

【伊豆市長】 はい、ありがとうございます。事務局から宗像市の不登校対策と今後の方針についての説明は終わりました。続けて、(2)について、事務局より説明をお願いいたします。はい。子ども支援課長。

【子ども支援課長】 はい。子ども支援課恵谷でございます。私のほうから、資料2を使ってご説明します。冒頭に先ほど示されてました、生徒指導提要の第4層、困難課題的な対応、これがエール・ホープ・GKIになりますので、お示しをしております。それではスライド1です。ここから、市内の不登校児童生徒を支援する三つの施設についてご紹介をさせていただきたいと思えます。教育サポート室エール、子どもの自立サポートセンターホープ、そしてChotGKI事業を行う玄海自然の家の三つがございます。施設の位置、開始時期、特徴、開所日について示したものでございます。これらの施設は、在籍校では校長判断により出席扱いとしている、不登校児童生徒の支援には福岡教育大のボランティアさんが活躍している、そういった共通点がございます。**令和7年4月**には、家庭から出ることが困難な児童生徒の支援を強化するため、家庭訪問事業を、以前のエールからホープに拠点を変更いたしました。これは家からホープへ通所をつなぎやすくするという大きな特徴、狙いがございます。家庭訪問事業についても今年度から学校長判断で登校扱い、そういう形に変更になっているところでございます。

2枚目をお願いします。教育支援センターの整備の経緯について簡単にご説明いたします。平成10年に宗像青少年センターの中に適応指導教室を開設し、平成31年

度には、教育サポート室エールに名称を改正いたしております。令和元年度にエールにおいて、家庭訪問相談指導員派遣事業を開始し、令和3年度には、増加する引きこもり傾向の不登校児童生徒が増えたということで、引きこもり傾向の児童生徒が安心して過ごせる場所を計画してありまして、令和4年度に有識者会議を立ち上げ検討し、そして、令和5年4月には、子どもの自立サポートセンターホープを開設いたしました。このホープの場所を選ぶにあたりましては、吉武地区の豊かな自然環境の中で、疲れた気持ちを癒やしながら、農作業など、自然を生かした体験活動を通して子供たちのエネルギーを溜めることができること、また、地域の理解と協力があること、これが大きなポイントでございました。

令和6年1月には玄海の家と宗像市教育委員会が事業連携協定をいたしました。この協定は、3施設の児童生徒の相互交流でありますとか、ChotGKI事業と市の在籍校との連携強化、施設職員間で相互交流、相互研修会による人材育成を図る、などの目的で協定の取決めを行ったものでございます。この協定に基づきまして、令和6年4月から市職員1名を玄海の家のほうに派遣をいたしまして、本市の不登校児童生徒の支援、学校、関係機関と連携調整を行っているところです。

スライド3については、エール・ホープの過ごし方、概要について、比較をできるようにまとめたものでございます。エールでは小集団で教科活動や教科学習活動や体験活動を行いながら、コミュニケーション力及び耐性の向上などを通じて、社会的自立、学校復帰を目指して支援を行っております。午前は教科学習、午後は体験活動を中心に、指導員が、支援を行っているところでございます。ホープにつきましては、不登校の引きこもり傾向にある子供たちが家から出て、安心して体を休め、エネルギーを蓄え、安心して過ごせる居場所でございます。一人一人に応じて、大学生ボランティアとの交流、自然環境を生かした体験活動などを通じて、自己肯定感や自立性、社会性を育てているところでございます。

それでは次のページをお願いします。スタッフ体制についてお示しをしております。エールでは学校復帰を主な目的としておりますので、教員免許所持者を中心としたスタッフ配置になっておりますが、ホープでは、保護者支援、ソーシャルワークに力を入れておりますので、福祉職の配置をしているところが主な特徴でございます。職員以外に、学生ボランティアと下に書いておりますけども、昨年度は、福岡教育大のボランティアが40名ほど登録いただいております。交代でボランティア活動により子供たちに支援を行っていただいているのが特徴でございます。

スライド5につきましては、お配りの資料の中につけておりませんので、画面のほうでご確認頂ければと思います。子供さんたちの顔が載っているので、画面だけにさせていただいております。3施設では、コミュニケーション力を養う、忍耐力を鍛え、自己肯定感、自己有用感を高めるなどの大きな目的を持って、様々な体験活動に取り組んでいるところでございます。近年、エール・ホープでは、特にボランティア

活動に力を入れております。昨年、エールでは、のぞみ園の皆さんたちへ読み聞かせを行うとか、図書館のボランティア、ホープでは、福岡教育大附属の幼稚園に行つて、お子さんの面倒をみたり、ボランティア活動をしたりすることによって、自己肯定感を高めることに大きな効果を確認できているところでございます。

6 ページ目です。事業の成果、子供たちの変化についてご説明いたします。括弧書きの中にエールとホープの成果について書かせていただいております。エールでは、児童の不登校解消率が 55.9%で、登録者 30 名中 19 名が学校復帰しております。9 年生 10 名全員が進学。家庭訪問、5 名中 1 人が学校復帰、1 人はエールの通室、1 人がホープの通所のほうにつながっております。ホープにつきましては、37 名中 2 人は、エール・GKI に転籍しております、35 名中 4 割程度が、学校に時々登校ができるようになったということで、学校復帰を目的としないんですが、元気になりエネルギーがたまって、学校復帰をしてるということでございます。9 年生、5 名全員が高校に進学をしている、そういった状況でございます。それと、ここに、その他の棒グラフで示しているんですけども、そもそもホープが学校復帰を目的としないということで、どういうふうに成果を表現しようかということで、ホープの開所当時から、子供たちの面談でありますとか、アンケートをいろいろ駆使しながら、どういったところが改善につながったかというところを分析しております。分析結果で、1 番多かったのが表情の改善、コミュニケーション力の向上が 42 名、学習に前向きになったのが 27 名、外出の機会が増えたのが 24 名。情緒の安定が 22 名ということで、トータルが 71 名だったと思いますが、そういうふうな効果ができておまして、学校復帰だけじゃない評価についても引き続き取り組んでいきたいと思っております。

最後スライド 7 をご覧ください。過去 5 年間のエール、ホープ、家庭訪問相談支援事業、玄海の家の利用全体の状況についてまとめたものでございます。これらの教育支援施設で、市の不登校児童生徒の約 3 割の支援を行っておりまして、支援率は毎年増加しているところでございます。

最後、総括でございますが、今年度から家庭訪問事業をホープに移し、積極的に SSW や学校との連携を図っております。そして、先ほど出てきました支援の行き届いていない児童生徒の支援につなぐように特に力を入れて取り組んでいるところでございます。さらに家庭訪問事業からホープの利用につなげて、家から出る支援というものをさらに進めていきたいと考えているところでございます。以上です。

【伊豆市長】はい。ありがとうございました。不登校児童生徒を支援する宗像市内の施設の現状について事務局から説明がありましたが、これを受けて、委員の皆様からご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。何でも結構です。では脇田委員からお願いします。

【脇田委員】 今二つ、それぞれで説明されましたけど、(1)(2)で考えるよりも、(1)も(2)も包括的に考えていかないと、この不登校問題というのは、解決というか、いい方向に行かないのかなと思いました。といいますのは、「学校に行かないのは悪なのか。」ということなのです。宗像市には、エールとホープという、学校に行けない子供のほうから見れば、多様な学びの場があるということなんです。この場を紹介するときに、「学校に行けない人はここにありますよ」というよりも、「こんな学びの場があるんですよ。行ってみませんか」と言う方がそこに反応する子供もいるのかもしれないということです。じゃあ学校は何もしなくてもいいのかというと、学校は学校ですべきことがあるんですよ。さっき生徒指導提要の中のグラフを見せられましたけど。ある本の中に、不登校の子どもに「何で学校に行かないのか」と聞いて、「学校は、しちやいけないこととやらなければならないことしかない。僕のやりたいことはどこにもない。だから、学校に行かないんだ。」と答えたと書いてありました。学校には、「やりたいこととか、みんなで行いたいこととか、そういうものがちゃんと保障されているのか」という問いかけがその本の中にあつたんです。つまり、学校はということを子どもたちに提供しているのかということですよ。ただ学校は不登校の数を減らすのにどうするかって考えるときつくなってきました。それよりもいろんな子供がいろんなところで学ぶ場をどう整えるかと考えた方が前向きになれると考えます。今、通信制の高校とかの在籍率は非常に高いです。学びたいと思っている子供はたくさんいると思います。だから宗像の子供たちには、たくさんの学びの場があるという方向で、不登校問題を考えていくと、宗像市は非常にいい取組をされているんじゃないかなと思いました。

【伊豆市長】 今の脇田委員の意見に対して執行部から何かありますか。

【教育支援室長】 ご意見ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。エール・ホープも他市にないような、ちょっと特徴的な組織といますか。通ってる子供も、学校復帰だけではないんでしょうけど、そこも含めて効果が出ているのは間違いないところではあります。あわせて、行けない子がいるところというよりは、多様な学びの場の一つですよというPRの仕方が確かに方法としては1番いいのかなと思いました。ありがとうございました。

【伊豆市長】 野上委員ありますか。

【野上委員】 子供の不登校に対して、宗像市は、サポート体制が本当に充実していて、成果も数字に出ていて、誰1人取り残さない支援としてはすばらしいと思います。ただ、保護者が協力的な家庭については支援につなげることもできると思いますけど、親子関係が良好でないとか、親が協力的でない家庭の子供の不登校についてはどのように対応されますでしょうか。

【伊豆市長】 執行部お願いします。

【教育支援室長】 はい。正直そこが1番難しいところで。当然、学校だけでは家庭の中までは入っていけないところもあり、福祉的な分野で何か連携しながら進めていく必要があるのかなと。そこが今年度、この幹事会等の中で、どうやっていくのか改めて検討していくことになるのかなと。正直、家庭の問題によって不登校になっている子供さんが多くいるのも事実でございます。

【伊豆市長】 よろしいですか。はい。では、大庭委員。

【大庭委員】 難しい問題だと思うんですけど。質問としては一つ。不登校の主な理由というところで、全国的な傾向の中で、宗像市としては、原因を分析されて、全国の傾向と重なるのか、宗像独特の何かがあるのか知りたいなと思いました。

【教育支援室長】 ありがとうございます。大方の傾向としては全国的にもほぼ一緒かなとは思っております。それから、今、数字をお出ししていて大変申し訳ないんですけど令和5年と令和6年見ていただいても数字が大きく動いていることもありますので、なかなか調査の回答法が難しいようなところもあるものですから、一つ主な理由をもう少し詳しく細かく分析できるような方法、学校側はちょっと答えやすくするような、調査の方法を考えることも一つあるのかな。もう少し細かく分析していった上で、検討していく必要があるのかなと思っています。

【大庭委員】 何かやっぱり解決の糸口につながるかなと思ってですね。

【教育支援室長】 そうですね。1番肝心なところですね。

【大庭委員】 これからが意見なんですけど、宗像市の場合とてもサポート体制が整っていて、今の子供たちにとってはいい環境だと思うんですが。実は最近、あるおばあちゃんから、7月に入って中学生のお孫さんが学校に行けない、と相談が入ったんです。不登校になった後のサポートはすばらしいと思うんですね。ところが、6月の終わりに、そういうきっかけになるようなことが起こったときの初期対応が少し厳しい状況だったようで。なかなかそれを乗り越えられずずっとそのまままきているんです。担任が若い先生なので、先日、学年主任と養護の先生も協力していただき、話げできたところです。実際、担任の先生を育てるって言ったらいいのですかね、その辺の関わり合いで、スタートが乗り越えられれば、状況は随分変わってくるのかなと思っています。宗像って昔から、子供のためっていうことでは、結構、教師集団が一つになれる文化があったというか、それが宗像の良さであり学校力みたいところだと思うんですけど。その辺が今どうなってるのかなって思ったりするんです。担任の先生もどうしていいか分からない状況の中で対応してあるようで、幸い、学年主任とか養護の先生が関わることで、おばあちゃんもいい方向に行くかもしれないという希望を持っています。先ほど言われたように、行かない自由っていうのを今認めてもいいんじゃないかということですが、「行きたくていけない子たちを救う」ということをやはり第1に思ってあげたいなというふうに感じました。

【教育支援室長】 チーム学校としての取組っていうのが大事なんだろうと思います。一

対一でやるというよりも、みんなで1人の子供をちゃんと見ていくというような体制づくりっていうのは、非常に大事な事かなと思っています。

【伊豆市長】では、石丸委員お願いします。

【石丸委員】はい。まず1点だけ質問です。(COCOLOプラン)この3番目の「学校風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする」のところでご説明を頂きました。その中で、1点十分にご説明頂かなかったところがあるんですが、「1人1台端末を活用した授業の実施」というのが、どういうふうに結びつくんですか。

【教育支援室長】学校で安心して学べるというか、難しいですね、1人1台端末でしっかり子供一人一人が楽しんで、そこで取り残されるわけじゃなくて、みんなで見ながら、勉強できるっていうところで1人1台端末って言いましたけども、ゆくゆくはこれをもうちょっと活用して、授業だけではなくて、例えばその子のその日1日の気分がどうかというのを、1人1台ありますので、それを活用して安心して学べる場につなげていくことができるんじゃないかということで、その1番最初のベースのところ、まずは1人1台端末は確保できていますというようなところで。

【石丸委員】はい、ありがとうございます。

【教育部長】実際に、不登校傾向にある児童生徒、それから、不登校の児童生徒もそうですけど、やはり学校とつながりを持っておくということは当然重視をしているところです。そしてまた、学習に関しても、不登校に入った児童生徒に対して、定期的に課題などを共有してやっていくということを進めております。その中で、学校にも来られない場合に、家庭に端末を持ち帰り、実際の授業なども見られるようにしている環境はあるのですが、学習の中で、家庭でどこまで使われてるかということ、なかなかそこに向かないというのが現状としてありますが、デジタルの端末については、しっかりと使っていくということで進めていきたいというふうに思います。

【石丸委員】ありがとうございます。それでは意見を申し上げたいと思います。今日の協議事項が不登校対策についてであり、このような対策を講じているということは本当にすばらしいことだと思います。それを伺いながら、お三方のお話はそうだなと思ったんですけども、今日のお話は、もちろん対策なので、支援する側、サービスを提供する側のご紹介であったように思うんですが、受ける側のロジックというか、その背景というか、そういったものが余り見えてこなかったように思いました。あくまでも私の感じ方かも知れませんが、よく使われる、いわゆる重層的な支援っていうところで、1層2層3層4層という、充実した支援ということになるかもしれませんが、先ほどおっしゃった、その4層にホープやエールや玄海が入るかもしれないけど、今日ご説明があったように、ホープとエールっていうのは、やはりそれぞれの不登校に関わる、フェーズって言ったほうがいいんでしょうかね、ステージじゃないんですよね。そういうそれぞれのフェーズに合ったサポートですよね。そうすると、ま

だ不登校かなあと言えないような段階からもう完全にこれはっていう、やはり子供が不登校に至る様々な背景から、それぞれのフェーズっていうものがあるんじゃないかと思うんですね。そのフェーズに合ったサポートをする、せっかくホープとエールというものがあるとするならば、それぞれのフェーズに合わせているっていうことを言うほうが、私は立派な不登校対策になるのではないかと思うんですね。そういう意味では結構国が言ってること、あるいは色んなこと言ってることをそのまま導入されていて、手堅くこの支援についての説明で分かるんですが、せっかく本市の特徴ある施設があるとするならば、だからホープなんだ、だからからエールなんだ、というような説得力があるほうが私はいいように思いました。そういう意味で、先ほど受ける側と言ったところで重要なのは、既に現場レベルでなさっていると思いますので、ぜひ進めていただきたいのは、やはり不登校の要因分析ではないかと思うんです。どうしたときに、行くのをやめるのか。実際に、コロナとおっしゃいましたので、これ一つの要因分析かもしれませんね。そういうところで、結局周りの雰囲気や環境が変わってくることによって、そういうことが発生するかもしれないという。それっていうのはフェーズの1の段階だとすると、どうやってそれを押さえるべきかとか、そういったその要因分析を丁寧にやってくれれば、よりエールとかホープの役割が明確になって実効性が高まるのではないかと思いました。そして、こういう貢献もあるんだと思ったのが、ホープとかが、非認知能力を高める役割をしてるんだっていう。非認知能力の自覚という言い方も変かもしれませんが、児童生徒が自分の非認知能力が高まった、という実感がもしかしたら学校に戻る大きなきっかけになるかもしれないと思ったわけですね。そういう意味では、まだエールやホープのポテンシャルっていうのは、高いように思います。ぜひ、そういった本市ならではの特徴を強調する上では、確かに重層的な支援っていうのも重要ではあるんですが、それぞれのフェーズでしっかりと対応するシステムが出来上がっているということをおっしゃったほうが、本市の不登校対策の十分な説明になるのではないかと思ったところでございます。以上です。

【伊豆市長】では私からもよろしいでしょうか。この不登校の理由というのを見てみると、第4の「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた」、そのあと11「学校生活に対してやる気が出ないなどの相談があった」ということがあるんですが、もちろん学力向上っていうのは、学校に対する要望ではあるんですが、果たして学校が、子供たちにとって楽しい場所であるのかっていうような問いかけも必要んじゃないか、その子がなぜ不登校になったかということも大事ですが、学校が、楽しい行きたいところであるのかというようなことも、学校現場を預かるみなさん方として、もう一度、考えていただく必要があるのかなと。私はひとえに給食をおいしくして、給食で子供たちを引っ張りたいと思ってるんですけど。給食だけは食べる、ということを目指している。それと子ども支援課が行っているハッピークローバーとなぜ連携して

いないのが残念で、不登校、それから引きこもりというふうに、何か画一的にこの状態を決めてしまうんじゃないかと、不登校の予備軍、引きこもりの予備軍ってたくさん子供たちの中にいると思うんですね。だから1番は子供たちが悩んでいることを、心おきなく聞いてあげるっていうことが、不登校や、引きこもりになることを防ぐ1番の方法だと。ハッピークローバーは、子ども子育て部のご尽力もあり、手紙でも出せるんですね。切手も貼らなくていいし、別に何も回答を要求しないのであれば、その子が一方的に自分の気持ちだけを書いて出せばいいし、それは学校の先生とは違う、学校とは違う、切り離れたものなんですね。で、やっぱり、自分で進めておいてなんですけども、やっぱエール、ホープ、SSWの人たちが、家庭訪問とかしていただく、この体制は確かに非常にいいと思うんですが、子供たちはなぜ、不登校や引きこもりになるかっていうと、学校が嫌いだからですよ。学校が嫌いで自分の居場所がないから学校に行かないんですね。それなのに、そのSSWの人とかが、訪問に来て、子供たちは心を開くだろうかっていう疑問です。これはぜひ、不登校や、引きこもりのこと、子供たちと直に接してこられた、そして子供たちが学校に戻るために、様々な体験等を通して指導してこられた吉武先生にもお尋ねしたい。

【ホープ 所長】なぜ不登校になったかって、要因が色々あるんですね。でも結構多いのが、「分かりません。何で自分が不登校になってるか分かりません」っていう子も結構います。子供たちを10年間ずっと預かったんですが、決定的に足りないのがコミュニケーション力、それから耐性、忍耐ですね。厄介なのはこの二つです。本を読んだから分かる力でも、人から言われて分かりましたっていう、培われる力でもないんですね。それを培わせるためには何が必要かっていうことでやってるのがいろんな体験活動です。体験活動もすればいいというものではなくて、体験活動にも意味があるのです。もちろん楽しいだけの体験もいいと思います。今私が仕掛けているのが、ゴールを見据えて、いろんな体験活動をやるということ。今、私、ホープで3年目になるんですが、畑を作っているんです。エールのときはこれを売りに行ったりしてたんですよ。でもホープではそういう話に一切ならない。それが、先日「収穫したものを売りたいよね」って言ったんです。これはチャンスと思って、すぐそういう場を見つけて、今やっけていってるんですけど、子供たちはこの先のことを今考えている。この売上げをもっともっと増やして、どう社会見学に行こうとか、何かしようかとしています。そうして、エネルギーがたまると自然と勉強したり、学校に戻ったりします。

【伊豆 市長】はい、先ほど脇田委員も言われたんですが、学校からドロップアウトしたから、エールやホープに行ってるんじゃないかと、エールやホープやGKIという、別の学校があるよという、何か認識で取り組んでいけたらいいかなというふうには私は思っておりますし、先ほども言ったように、自己肯定感とか、それが上がる、最終的には、私はもうね、生きていさえすればいいって思います。生きていさえすれば。

今のところ、宗像市で自殺した子はいません。最近、この何年間はいません。もうとにかく生きていさえすればいいというのが1番の目標ですよね。いろんな意見が出ましたので、最後に教育長からご意見あればお願いします。

【猿 樂 教 育 長】4層構造の図ちょっと出してもらっていいですか。委員皆様、市長、ありがとうございました。まず、私どもちょっと考えているのが、先ほど市長がおっしゃいましたハッピークローバーがちょっと記載しておりませんので、あれは、第2層の「教育相談体制」の1番左のところ「教育相談体制の充実・生活アンケート等」の中に入ってございまして、申し訳ありませんでした。ハッピークローバーなどのアンケート等というふうにしたいと思いますので、そこは申し訳ありません。

【伊 豆 市 長】私がハッピークローバー推しなので。

【猿 樂 教 育 長】ハッピークローバーを「等」の中に私が入れてしまいましたので、そこは、改善したいと思います。それで、今年度、先ほど市長がおっしゃいました自己肯定感というところがありましたけども、私どもとしては今年度は、子供たちが「本当に学校が楽しい」と、まずはそこを重点目標として、学校のアクションプランの中にも掲げているところがございます。それで、脇田委員がおっしゃったところがございますが、まず1番最初にやらなきゃいけないのは「発達支持的生徒指導」のところ、児童生徒にとって学校が安全安心な居場所となるために、まずはそこで分かりやすい授業、それから特別活動ですね。そういったところをしっかりと充実させていって、学校が子供を引きつける力があると。もともとは小中一貫教育もそこでやってきたところがございますので、今後も徹底していきたいなと、そういうふうに思っているところがございます。その中で、先ほど石丸委員も、それから野上委員もおっしゃいましたけれども、私たちがやらなきゃいけないのはそのフェーズですね。そこから第1層から第2層のところに行くところで、いろんなハッピークローバー等のアンケート等も含めながら、その子に一体どういう特性があるのか、発達特性としてですね、あわせてそのアンケート等を活かしながら、子供たちが置かれている家庭の状況ですね、今話題になっておりますヤングケアラー、それから虐待、ネグレクト、そういったところがあるのかないのか。あわせて、家庭が非常に居心地がよすぎて、もう学校に行きたくなくなっているとか。親のほうから「学校にも行かんでいいよ」とかいうように、逆に家庭が子供を引き寄せていないか、学校に行かずにですね。そういったところの分析も今後はやっていかなくてはいけないなと思っております。この宗像市の強みは、そんな中でも子供たちが、このエール・ホープという学校外の施設に向かう力を持ってるんです。ですから、今後私どもがやらなきゃいけないのはこの不登校になっている子供たちの要因背景というのを、先ほどのアンケートだけではなくて、本人と学校との関係、あるいは特性との関係、それから本人と家庭等の状況、それから本人が施設に向かう力があるのかどうか。そういった国の言っている実態分析とは違う、要因分析をしっかりとしながら、そのフェーズというのをより強固にしながら

ら、SSW等の力も借りて、宗像市独自の不登校対策というのをより強固なものにしていきたいなと思っているところでございます。以上です。

【伊豆市長】ありがとうございます。追加ですけど、宗像市の特徴のもう一つは、福岡教育大学が宗像にあるので、この教育大学の学生さんたちが、石丸委員とかが窓口となり、多くのボランティアの方々が、子供たちに接していただいているということが非常に大きいと思いますので、福岡教育大学の学生さんたちによらず、やはり年齢の近い、そしてそういう人たちもなるべく多く、その人たちは宗像のエールとかホープの取組を知らない人も多いと思うので、そういう学生のボランティアの皆さんたちの力ももっと引き寄せるといふか、そういうことをやっているの、ぜひ協力してくださいみたいな、そういう場を、私自身としては、今後もっと知らしめていきたいと思っておりますので、引き続き、教育委員会の皆様には、よろしく願いいたします。

特にほかに追加でご意見ございませんか。よろしいですか。

ではこれで協議を終わります。貴重なご意見をありがとうございました。本日の協議で頂いた皆様のご意見を受け、今後、不登校対策についても、より進めていきたいと思っております。

(2) その他

【伊豆市長】では、不登校対策についての協議は終わりましたが、それ以外のことで、この機会に何かご意見とかご質問等がありましたらお願いします。ございませんか。では、以上で協議を終了いたします。それでは事務局から何かありますか。

3 閉会

【教育総務課長】次回の会議は令和7年10月を予定しております。詳細につきましては、期日が近くなりましたら改めてご案内いたしますので、よろしくお願いいたします。以上です。

【伊豆市長】では、皆様、お暑い中ご出席を賜りましてありがとうございました。以上をもちまして、令和7年度第1回宗像市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。